

平成24年度学長裁量経費研究推進支援プロジェクト研究成果報告書

1. 研究の概要

プロジェクト名	20世紀前半のカナダにおける使用人の研究：移民問題と使用人の生活状況について		
プロジェクト期間	平成23年度～平成24年度		
申請代表者 (所属講座等)	西村 美保	共同研究者 (所属講座等)	
取組方法・取組実績の概要	<p>本プロジェクトは申請代表者単独で行うもので、20世紀前半のカナダにおける使用人の生活実態を明らかにすることを目的とする。そのために以下の3点について明らかにする必要がある。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. カナダへのイギリス移民の歴史 2. 外国から移住してきた使用人のうち、どの程度イギリス人がいたのか、そしてどのような経緯で彼らがカナダに移住してきたのか 3. 移民で、かつ使用人という低い身分にある労働者がカナダにおいてどのような扱いを受け、また移民使用人たちが自分たちの仕事や身分についてどのような認識を持っていたのか <p>平成23年度は主に上記1.及び2.に関連する資料の収集、整理、分析を行った。 平成24年度は引き続き1.及び2.の研究を継続し、更に3.の研究を重点的に行った。移民は下層階級出身者が多いことが分かっているため、1.で分かった移住の経緯が2.についても適用できると思われる。</p>		
研究成果の概要	<p>平成24年度の研究成果は以下のとおりである。</p> <p>研究成果としては、本研究開始までは、イギリス国内の使用人について研究していたが、本研究によって使用人の需要が供給を上回る状態がイギリス以外の国でも起きていたこと、そのためにイギリスから使用人を移住させる政策が取られたことなどを知り、グローバルな視点で使用人の問題を考察することができるようになったことである。具体的には、19世紀から20世紀前半にかけて、カナダだけでなく、オーストラリアなどの外国においても、使用人が不足する状況があり、イギリスから使用人を呼び寄せたことが分かった。そして、本国イギリスにおいて、19世紀後半には既に使用人に対する人気は陰りを見せていたが、そのことも外国でも同様であり、その背景には産業の機械化による職場の多様化があった。使用人に対する需要の高まりが使用人の移住を促し、19世紀後半から20世紀にかけて、使用人の移動はグローバルな展開を見せたが、どの国も使用人文化の衰退を止めることはできなかった。</p> <p>Marjory Harper and Stephen Constantine, <i>Migration and Empire</i> (Oxford: Oxford University Press, 2010)によれば、第1次世界大戦後イギリス政府が国庫補助の移住政策を復活させた。この時移住した人々は86,000人以上であり、そのうち約3分の1(26,905人)が、カナダへ渡った。New Brunswick(ニューブランズウィック—カナダ南東部の州)とthe prairie provinces(プレーリー諸州—カナダのManitoba, Saskatchewan, Alberta州の総称；穀倉・油田地帯)における援助された移住・定住プログラムによると、20,000人の若い女性が家事使用人としてカナダへ渡った。</p> <p>家事使用人のイメージは働く国が変わっても、同様のものであり、平等の地位が与えられるといった甘い言葉に誘われて移住してみたものの、実際には、本国同様、多くの女性使用人が「目に見えない存在」でしかなく、家事奉公は、私的空間の閉ざされたドアの背後で虐待される危険性をはらんだ仕事であった。そして、20世紀の未婚女性の雇用機会の広まりと家事奉公への嫌悪によって、本国イギリスにおいてさえ「使用人問題」(‘servant problem’)についての嘆きが拡大していった。</p>		
外部資金獲得申請及び研究成果の公表方法等について〔 <input type="checkbox"/> (該当事項) にチェック方願います。〕			
外部資金獲得申請 (予定)	<input checked="" type="checkbox"/> 科学研究費補助金 <input type="checkbox"/> 受託研究費 <input type="checkbox"/> その他 ()	研究成果の公表方法 (予定)	<input type="checkbox"/> 学会 (国内・国外) : <input checked="" type="checkbox"/> 新聞・図書・雑誌論文等 : <input type="checkbox"/> その他 :